

研究題目

コロナ禍において学校生活の充実をめざす取り組み・試みの一事例 ～希望の登校、満足の下校の実現に向けての工夫～

目 次

- 1 はじめに
- 2 問題意識
- 3 研究の具体
 - 視点
 - 取り組みの具体と結果
- 4 これからのこと
 - ～成果と課題にかえて～
- 5 おわりに

千葉県成田市立公津の杜小学校 校長 半田 康

1 はじめに

人知の及ばない災害に繰り返し見舞われている。千葉県は、東日本大震災に見舞われたのち、毎年の台風被害、ことに昨年は2つの台風の直撃、大雨による甚大な被害があった。そして昨年度末からの新型コロナウイルスの感染拡大。永続的かつ安定した学校教育活動が脅かされているというよりも、できない状況にある。

様々な制約、不自由さを背負った日々の生活にもかかわらず、学校生活の中での子どもたちは、マスクの下の笑顔を絶やさない。教職員は、暑さも加わる中、できる限りの配慮を施しながら、ひたむきに教育活動に専念する。経験のない状況下での学校教育の創造的な努力のささやかな一例をこうした機会に残しておくべきだろうと考えた。それが、本稿執筆の動機でもある。

2 問題意識

(1) 地域・学校・児童

若さと活気を感じる地域

成田市公津の杜地区は、成田市の南西部に位置し、酒々井町と隣接している。面積においても児童数においても、公津の杜地区の新しい住宅地がほとんどを占めている。本地区は京成電鉄の公津の杜駅を中心に宅地開発が進み、大型商業店舗や各種の商店が建ち並び、近代的な街並みを形成している。商業施設を中心に大規模集合住宅が建設され、その周辺に戸建て住宅の街並みが形成されている。また近年、国際医療福祉大学医学部・看護学部・保健医療学部が駅の間近に建ち、若者が増え活気に満ちている。

向上心を持った教職員集団

公津の杜小学校（以下、本校）は平成18年4月に隣の小学校からの分離校として創立し、本年度15周年を迎える。

平成28年度から千葉県から食育に特化した家庭科教育の研究指定を受け、平成29年には文部科学省からの研究指定も重なり、平成30年には関東甲信越地区小学校家庭科教育研究千葉大会の会場校として授業公開と研究発表を行った。

本年度の児童数は令和2年5月1日現在788名。通常学級24、特別支援学級4の計28学級という市内では2番目の規模である。教職員数は県費教職員と市の教職員合わせて58名になる。例外なく、ひたむきで誠実な教職員集団であり、何よりもそれぞれの年齢にかかわらず、自らを伸ばしていこうという意識を持っているということが目標申告シートや面接から伝わってくる。ただし、子どもの無垢な感性や突き抜けた発想を楽しんだり、そこから学んだりしていこうとする姿勢がもっとあってよいと感じるときがある。教師は、教える・指導する立場であるというスタンスを強く感じる。そこに課題がある。

潜在的な力をもつ子どもたち

児童の学力は総じて高い。全国学力学習状況調査、成田市独自の学習状況調査においても、平均を大きく上回る。ただし個人差は大きい。また、教職員の指導や指示を素直に受け止め、一生懸命努力していこうとする姿がある。「石橋をたたいて渡る」タイプの児童が多い。何事に対しても自信を表出することは少ないが、実は自らの力を発揮したいという思いや、発揮するに十分な潜在的な力を持ち合わせている子どもたちである。与えられた課題のクリアのために意欲を燃やしていく子どもたちである。

コロナ禍での状況において、学校に活気を生み出していくためには、この子どもたちの持ち前の良さと潜在的なエネルギーを生かさない手はないと考えた。

(2) 昨年度末からの状況と児童の様子

新型コロナウイルスへの感染拡大により緊急事態宣言が発出された前後の状況は、今更振り返るまでもない。

この前後において、本校では3月初旬に予定されていた6年生を送る会は、集会の形式をとらず、映像で実施した他、卒業式、入学式、そして運動会、すべての行事の縮小・中止を余儀なくされている。

このような制約や不自由さを強いられた学校生活にもかかわらず、子どもたちは、表だって不平や不満を口にすることなく日々の学校生活を送っている。わたしは、この3年間、短い時間だが赴任先の学校で6年の子どもたちと面談を行ってきた。現在も継続中だが、ほぼすべての子どもが、学校生活が楽しいと言う。

こうした子どもたちの姿に、応えていきたい。これが私の取り組みの問題意識と言うよりも強い動機である。(1)で述べた教職員集団と子どもたちの特性を生かした、この状況を受け止めながらも、苦境を逆手にとるような教育活動の展開、考え方の転換の試みを記録として述べていきたい。

3 研究（取り組み）の具体

(1) 視点

大きく2つの視点で取り組んでいる。

《視点1》

校長として、コロナ感染防止にむけた教職員の意識と児童の意識をどのように高め、しかも継続させてきているかという視点。

《視点2》

「苦境を逆手にとるような教育活動の展開」と「考え方の転換」という視点。ここでは運動会という一大イベントと、教職員の研修の持ち方、不登校児童への対応を例にとりたい。

(2) 取り組みの具体

～意識の高揚と継続、そして逆境ならでの発想・発想の転換～

行政からは、様々な配慮事項や対応が学校現場にリクエストされる。しかもそのリクエストは、感染状況によって流動的になる。経済活動の活発化は、学校現場に身を置く自分の私見を述べるならば、あまりにも酷だ。学校は、ここまで日々消毒作業に時間を費やし、子ども一人ひとりの発熱事案、保護者の体調不良に過敏な対応を余儀なくされているのが現実である。経済活動の緩和規制によって、大人の感染が拡大するのではないかと、大げさに言えば戦々恐々としている。一方で保護者の立場に立てば、経済活動の活発化は各家庭の死活問題にもなり、学校はジレンマを抱え続けることになる。

しかしこの事態を、状況への適応と自律的な姿勢と、苦境における創造性の発揮のよい機会と考えれば、またとない教育の機会に恵まれたと希望を持てる。

そんな中、休校期間が明けた令和2年6月に、本市教育委員会から「今後の学校教育活動の段階的な運営について」というタイトルで次のようなイメージ図が発出された。

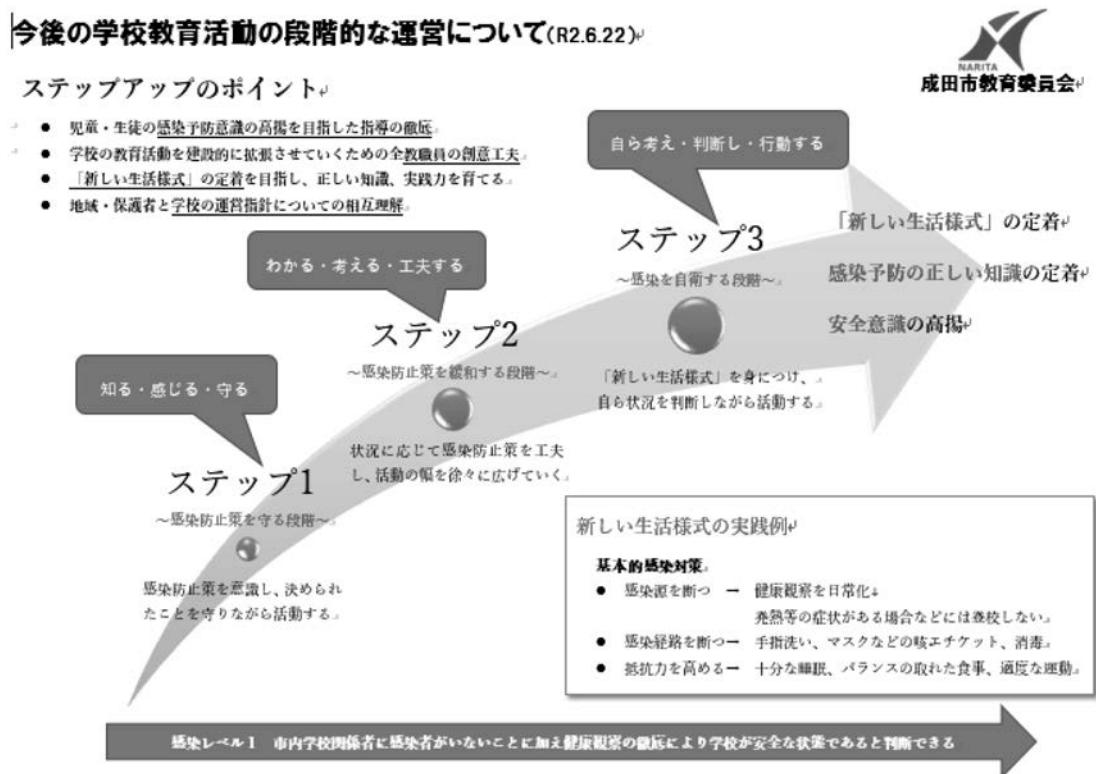


図1 成田市教育委員会の学校教育活動の段階的運営のイメージ図

しかしながら、ステップ1からステップ2へ、そしてステップ3へと段階が上がる基準は、学校に委ねられた。つまりどういう状態になれば、ステップ2に緩和していけるかの統一的な基準は持たないという特徴をもつ指針であった。

このイメージ図は、曖昧さはあるものの、ステップ1・2・3というキーワードを与えられたこと、段階を上げる基準を考える自由を与えられたことという2つの価値を感じた。キーワードと自由を十分に生かしながら、児童と教職員の自律的な態度と姿勢を芽生えさせ、意識の継続を図りたいと考えた。その上で、これまでにない教育活動の構想を立てたいと考えた。

次の項で、その手立てとその経過を述べ、さらに続く項で、これまでにない教育活動の構想と現在までの進捗を述べる。そこに「苦境における創造性の発揮」ということも盛り込みたい。

① 意識の高揚と継続 ～手立て「アマビエチェック」～

手立ては極めてシンプルである。ステップをあげる基準を明確にするということと、ステップが上がった先のビジョンを明確にするということだ。つまり、どうなったらステップ1が2になるのか。ステップが上がるとどうなるのかということ、子どもにも大人にも明確に示していくことが手立てとなる。

そこで考えたのが、下に示すチェックリストである。児童にとって行動のチェックを身近にしていくことが、自律的な姿勢を芽生えさせる第1歩だと考え、このチェックを「アマビエチェック」と名付け、浸透を試みた。

【表1 アマビエチェック】

アマビエチェック

第3回評価日・・・7月27日 集計結果を根拠の一つとしてStep2への移行を判断。

職員 児童	Step1	～感染防止策を守る段階～ 行動チェックリスト	評価			
			ほぼ達成	もう少し	まだまだ	
職員 の 配 慮 と 対 応	職 員 の 配 慮 と 対 応	①マスクを着用して業務に当たっている				
		②給食の配膳時はフェイスシールドを使用している				
		③授業時間帯に児童を対面にして活動させていない				
		④児童同士の距離に配慮して学習活動を行っている				
		⑤天候・室温が許す限りにおいて換気を行っている				
		⑥校舎内では児童同士の身体接触を避けた学習活動を行っている				
		⑦児童同士のものの貸借をさせていない				
		⑧1日1回活動場所等に消毒を行っている				
	き 児 童 の 働 き	き 児 童 の 働 き	①必要があれば他者との距離をとらせる働きかけをしている			
			②教室移動や体育の授業の前後・給食前等に手洗いをさせている			
③通常時はマスクの着用を働きかけている						
④登下校の際、他者との距離を保つ働きかけをしている						
⑤トイレや手洗い場で密が起らないように働きかけている						
児 童 の 生 活 場 面	学 校 生 活 場 面	①マスクを着用している				
		②学習活動の場面で他者との距離を保とうとする態度が見られる				
		③マスク無しで大音量での発声を伴う歌唱や発言等をする事はない				
		④学習用具等の貸し借りをしていない				
		⑤給食時に飛沫の飛散のない配膳・整列・喫食をしている				
		⑥教室移動や体育の授業の前後・給食前に手洗いをしている				
		⑦休み時間に他者に近づきすぎないように気をつけている				
		⑧登下校時に他者との距離を保とうと意識している				
		⑨トイレや手洗い場で密が起らないように気をつけている				

※はStep2移行への許容評価 すべての項目において教職員の85%以上が許容評価以上でStep2へ移行。

チェック項目については、国や市教育委員会から発出された数々の文書を参考に、校長自身が定めた。このチェックは、教職員が自分自身をチェックするとともに、学校生活の様子から、児童について「ほぼ達成」・「もう少し」・「まだまだ」という3段階でレイティングしていくという方法をとった。そして、評定をした教職員の85%に当たる人数が、児童の項目⑦⑧（⑦休み時間に他者と近づきすぎないように気をつけている ⑧登下校時に他者と距離を保とうと意識している）以外で「ほぼ達成」評定した時点で、STEP2への移行の第一条件とした。児童の項目⑦⑧については、85%の教職が「ほぼ達成」と認めるまでには、ハードルが高すぎる。そこで、評定を参考にしながらも校長自身が、児童の登下校の様子や、休み時間の過ごし方等を見守り、その様子を勘案して、クリアできている状態かどうかを判断した。

このアマビエチェックを行うことについては、教職員には企画会議・職員会議を通じて、児童には校内放送で知らせた。また、児童にはSTEP1のクリア基準を知らせた。その際、「85%の先生方が・・・」とすると、低学年にはわかりづらくなってしまうため、「先生方が皆さんの様子を見て点数をつけます。その点数が全部85点以上だったら合格です。」と、%の数字を点数に置き換えて、児童には知らせていくようにした。

以上のような手立てをとることで、新しい学校生活様式を大人も子どもも意識化させる・学校全体として児童に達成感を与えながら難局を乗り越えていく経験値を積んでいこうと考えた。

② 手立ての効果 ～アマビエチェック結果の推移～

6月30日に第1回アマビエチェックを行って以来、9月4日までに4回のチェックを繰り返してきた。ということは、少なくとも3回は、STEP1がクリアされることはなかったということだ。アマビエチェック実施日は以下のとおりである。

【表2 アマビエチェック実施日とトピック】

チェック実施日	トピック
令和2年6月30日	初めてのアマビエチェック日。
令和2年7月10日	STEP2になることが運動会（モリンピック）実施の条件であることを児童に伝える。
令和2年7月27日	合格には至らないが、低迷していた項目が大きく向上した。
令和2年9月4日	この日のチェックをもってSTEP1をクリアとする。

実現しにくい項目が明確になる

教職員は、学校の共有フォルダーの中につくられた「アマビエチェックシート」

に、自らの自己評価も含め評定を入力する。入力完了次第、この結果を校内放送で児童に知らせていった。以下、「職員の配慮と対応（職員自己評価）」、「児童への働きかけ（職員自己評価）」、「児童の学校生活場面（児童に対する評定）」の3つに分けて、そこに含まれる各項目のチェック結果を次頁に示していく。

教職員自らの行動に関する項目（アマビエチェックリスト中、「職員の配慮と対応①～⑧）」については、1項目を除き、初回のチェックからほぼすべての項目で100%に近い達成だった。ただ、1項目のみ、3回目でようやく合格ラインを超えたものがある。「児童同士の距離に配慮して学習活動を行っている」という項目である。

一方、教職員の「児童への働きかけ」についても、同じような傾向を呈した。4回目になってようやく合格ラインを突破した項目があった。「登下校の際、他者との距離を保つ働きかけをしている」という項目である。

この傾向が何を意味しているのか。教職員のジレンマがこの2つの結果に如実に表れていると考察する。

【表3 アマビエチェックの結果の推移】

職員 児童	Step1	～感染防止策を守る段階～	経過			
		行動チェックリスト	6月30日	7月10日	7月27日	9月4日
職員	職員の 配慮と 対応	①マスクを着用して業務に当たっている。	100	100	100	100
		②給食の配膳時はフェイスシールドを使用している	91	91	93	96
		③課業時間帯に児童を対面にして活動させていない。	73	95	93	93
		④児童同士の距離に配慮して学習活動を行っている	66	77	86	98
		⑤天候・室温が許す限りにおいて換気を行っている	98	100	100	100
		⑥校舎内では児童同士の身体接触を避けた学習活動を行っている	86	98	95	98
		⑦児童同士のものの貸借をさせていない	91	91	100	100
		⑧1日1回活動場所等に消毒を行っている	98	100	100	91
	児童 への 働 き か け	①必要があれば他者との距離をとらせる働きかけをしている	95	100	98	100
		②教室移動や体育の授業の前後・給食前等に手洗いをさせている	98	98	100	98
		③通常時はマスクの着用を働きかけている	95	100	100	100
		④登下校の際、他者との距離を保つ働きかけをしている	68	77	74	96
		⑤トイレや手洗い場で密が起らないように働きかけている	80	84	98	98
児童 学 校 生 活 場 面	①マスクを着用している	86	89	89	93	
	②学習活動の場面で他者との距離を保とうとする態度が見られる	27	30	50	85	
	③マスク無しで大音量での発声を伴う歌唱や発言等をする事はない	89	98	95	98	
	④学習用具等の貸し借りをしていない	77	77	93	100	
	⑤給食時に飛沫の飛散のない配膳・整列・喫食をしている	80	77	81	89	
	⑥教室移動や体育の授業の前後・給食前に手洗いをしている	84	89	100	100	
	⑦休み時間に他者に近づきすぎないように気をつけている	△が70	△が84	90		
	⑧登下校時に他者との距離を保とうと意識している	△が73	△が73	77		
	⑨トイレや手洗い場で密が起らないように気をつけている	73	52	74	91	

本校のような比較的大きな規模の学校にあつては、100%「密」な状態を避けることはむずかしい。「物理的に無理でも、働きかけの必要は感じる」、「制約を強いる学校生活の中で、友人との自然な関わりを無理矢理に否定することが、子

どもの心によい影響をもたらすのか」こうした心理が働いて、児童への働きかけを躊躇してしまう結果になるのだろう。しかし、それでもSTEP 2へと向かっていかなければならない。

一方、児童の様子について目を転ずると、教職員自身の自己評価と呼応するように、児童の学校生活場面の項目②「学習場面で他者と距離を保とうとする態度がみられる」は極めて厳しい結果が続いた。

また、項目⑨「トイレや手洗い場で密が起こらないように気をつけている」は、教職員の多くが、児童に対し働きかけているにもかかわらず、こうした姿が極めて実現しづらいということがはっきりとわかった。

加えて、給食の配膳と片付け時の3密回避の行動の難しさも浮かび上がる。本校は、喫食中は、かねてより「もぐもぐタイム」といって私語をせずに味わいながら食べる約束事が徹底されているため、飛沫等が飛散する行為はないが、配膳時の行動変容は、実現がむずかしいことがわかった。喫食時の際の配慮であれば、場所の確保と喫食児童数の分散化によって実現できるが、配膳時の「密」は、児童の意識向上が頼みの綱とならざるを得ないことを再認識させられた。しかしそれでもSTEP 2へと向かっていかなければならない。

なお、チェックリスト公表時から、85%（点）の達成はむずかしいと想定していたのが、項目⑦（休み時間の3密回避）と項目⑧（登下校時の3密回避）である。両項目の評定については、次のような調整を図りながら4回目の結果公表に至った。

休み時間の様子と⑧の登下校の様子の評定について、1回目と2回目は、「ほぼ達成」と「もう少し」と評定した教職員の合わせた割合が85%を超えることでクリアとみなそうと考えた。その数字が表3の該当項目に記されている。（1回目・2回目のチェックまででは、「ほぼ達成」と評定した教職員はいない。）4回目の数字が抜けているのは、この時点で、「まだまだ」と評定する教職員がいなくなり、1回目・2回目の方法で評定を調整すると、100%（点）になってしまい、点数の現実味が失せてしまう。そのため、さらなる調整の必要が生じた。実際は、項目⑦の「ほぼ達成が76%（点）と項目⑧の「ほぼ達成」が72%（点）であった。合格ラインまでにはあと一息だが、複数の教職員から、密を避けようとしていたり注意を互いにしていたりする発言が、多くなってきたという報告を受けて、児童には76点のところ、ボーナスということで10点をプラスして86点とした。一方⑧については、毎日の登校の様子を見た限り、「密」状態が緩和できたと考えて、登校の様子に100点を与え、下校を72点として換算し加算して2で除した数=86を点数とした。これが表3の該当項目を空欄にした理由である。

これまでをまとめてみる。4回のアマビエチェックをとおして、実現がむずかしい項目が浮き彫りとなった。それが以下に示す項目である。

《教職員の対応・配慮、働きかけ》

- 児童同士の距離に配慮した学習活動（ア）
- 登下校の際の3密回避に向けての働きかけ（イ）

《児童の行動》

- 学習場面で他者と距離を保とうとする行動・態度（ウ）
- 学習用具の貸借（エ）
- 給食配膳時の3密回避行動・態度（オ）
- トイレや手洗い場での3密回避行動・態度（カ）
- 登下校の際の3密回避行動・態度（キ）
- 休み時間での3密回避行動・態度（ク）

チェック結果をもとに講じてきた手立て

（ア）（ウ）（エ）について

これについては、物理的環境によるものが大きく限界があった。教職員は、廊下のスペースまで使った学習活動場所の確保をしたり、児童の座席位置を工夫したりと苦労していたが、スペースを広くとると教職員の声が届かない児童が生じる等、弊害も出る。距離が十分とれないことを、声を抑えた授業の実施によって克服しようとする、求められている授業改善に逆行するようなものになってしまう。

教師の弛まぬ働きかけという地味な手立てだけでなく、児童自身の意識の向上に頼るしかないと考えた。そこで、子どもたちの多くが楽しみにしていた例年よりも縮小した運動会（モリンピック 9月17日開催）は、STEP2に上がることが開催の条件であるということを、2回目のアマビエチェック結果発表の際に告知した。STEP1のままであれば、モリンピックの開催はないということだ。2回目の結果発表の後、（ア）と（ウ）は、より切実なこととなり児童の注意を喚起しようとする気持ちが、少しずつ言葉に表れてきた。

一方、（エ）については、教職員の「忘れ物をしないようにさせたい」という日常からの思いと、アマビエチェック項目がピッタリと重なり、「どうして忘れ物をすべきでないのか」ということが、具体的に児童に伝わり、2回目から3回目にかけて劇的な向上を果たした。

（イ）（キ）について

以下に述べる（イ）（キ）への手立てについては、教務主任が主導して実施してきた。

登校時間帯の密の回避する手立ては、低中高学年の登校時間帯に差をつけての分散登校であった。残念ながら実施してしばらくの間は、十分な姿を実現することができていなかった。そこで、1回目の結果発表後、さらに時間差を2倍にして、分散登校の強化を図った。それでも、合格ライン突破には時間がかかった。

しかも、兄弟姉妹のことを考えるとき、分散登校の徹底はなかなかむずかしい。実施前よりも大きな変化はあったものの、私たち教職員が望む姿と、子どもの自己評価、さらには各家庭の事情と、通学路の道路事情等を考えると、今の姿が精一杯だという校長としての判断だ。教職員も、登校については、様々な事情が重なっていることを認識したこと、「モリンピック開催」の条件を告知したことにより許容範囲を広げていったものと考えられる。そうしたことが、4回目の結果に反映されたのだろう。

一方、下校時間帯の密の回避について、特に全校児童が一斉に下校する月曜日と木曜日の様子を教職員が問題視し、手立てを講じた。教務主任の呼びかけと計画により、同じ昇降口を使用する学年の下校時刻を5分程度ずらすことで、昇降口付近での密の回避をねらった。密の原因は、一緒に下校する友人を待つ行為だった。この行為は、防犯的には否定できない行為だ。待つためのスペースが十分でないという事情も重なり、教職員は、むずかしい働きかけが求められてきた。モリンピック開催がかかっているという状態になっても、特に高学年の「密回避」は、十分と言えるものではなかった。4回目のアマビエチェック間近の下校時間帯には、管理職自らがハンドマイクで「是非ともSTEP1をクリアしてほしいので、君たちも協力してほしい。友人を待つときにソーシャルディスタンスを確保してほしい」という訴えを児童に向けて行わざるを得ない状況であった。登下校の密の回避については、手立てと働きかけの難しさを強く感じた。

(オ) (カ) について

この2つの項目も、物理的な環境が大きく影響する。本校は廊下がワークスペースとして活用できるような構造になっている。(オ)に対する手立てとして、このワークスペースを生かした配膳と喫食を実施した。しかしながら、すべての学級がワークスペースの恩恵を受けることができない。そのため、そういった学級・学年は、児童を二つに分け、教室ともう一つの場所（特別教室等）で給食を食べるようにした。

一方、(カ)については、難航した。手洗い場の蛇口とトイレの数は、児童数に比してとても少ないのが、本校の現状である。したがって、その場所での密の回避は困難を極めた。トイレは、全員が同じタイミングで行くということはない。そのため私たちは、特に児童数が多く、密が生じやすい（体が大きく一人ひとりの専有面積が大きい学年）高学年の給食前の手洗い行動に焦点を当てて対応した。具体的には、理科室・家庭科室等のすべての水道を高学年に開放し、密の解消を図った。結果として、対応前に比べ、給食前の手洗い場の密は解消させることができた。

(ク) について

「休み時間」の過ごし方について、私たち教職員は、心配するとともに、これ以上児童にストレスを感じさせるような措置は、得策ではないと考えていた。つ

まり、昼休みという子どもにとっては、一日の中での貴重なガス抜きの時間を奪うことは、かえって児童の気持ちを不安定にさせるだろうと考えた。しかし一方で通常通りの昼休みでは、校庭のあちこちで「密」が発生するだろうということも想定できた。これは、清掃時間帯も同じである。そこで、昼休みと清掃を2ブロック制にして、全校児童が同じ活動をするのを防いだ。以下にその時程を示す。これについては、教務主任が校庭使用の管理担当の体育主任と話し合いながら計画し対応してきた。

【表4 昼休みの2ブロック日課】

時間	学年等	活動
12:50~13:05	1・3・6年	昼休み
	2・4・5年・スマイル学級	清掃活動
13:10~13:25	1・3・6年	清掃活動
	2・4・5年・スマイル学級	昼休み

この結果、対応前に比べ、当然のことながら校庭での密集状況は緩和された。少しだけ広々とした校庭で、多くの児童は、他者との距離をとらなくてははいけない遊び方、つまり「鬼ごっこ」をして汗を流している。一方で、ドッジボールコートの使用を許された学年等は、ボール遊びに興じる傾向があり、完全な密集状況をコントロールしていくことは、むずかしいのが現実だ。児童を完全なコントロール下に置くか、児童の精神的なものを少しでも和らげていくか、コロナ禍が続けば、さらなる工夫がなされた対応が迫られる。



図2 アマビエチェックの結果を知らせるチラシ

その他の手立て

いかにアマビエチェックを児童に身近に感じさせるか、そしてその結果に関心を持たせていくかが重要であると考えた。そこで、1回目から3回目の結果公表後、すぐに結果を掲載したチラシを作成し各学級に届け、児童の啓発を試みた。数字で効果を示すことはできないが、児童に親近感を持たせることができたのではないかと考える。

現在、計画委員会の児童が、昼休みの校内放送で全校に向けてアマビエクイズ

を出している。

③ 逆境ならではの発想・発想の転換 ～新たな企画と既存行事の改革～

新たな企画を発想

子どもたちが発案「医療従事者へのメッセージ」

「こんな状況だからこそ自分たちにできることを発想してほしい。」これが、学校が再開された6月の全校集会（校内放送で実施）で、私が子どもたちに投げかけた言葉である。「潜在的な力を持った子どもたち」である。必ず某かのアイデアを発想するだろうと確信していた。案の定、この全校集会をきっかけにして、児童会活動が動き出した。その一つ、異学年の交流活動を企画する「なかよし委員会」の子どもたちが、医療に従事する方々に励ましとお礼のメッセージを送ろうというアイデアを発案した。本校の学区には、国際医療福祉大学の成田キャンパスがある。また、成田赤十字病院も近隣にあり、病気やけがの時にお世話になった経験を持つ児童が多数いる。こういった環境だったため、このアイデアの発案は必然だったと言えよう。

このあと、「なかよし委員会」の児童は、全校に向けて、「病院で働いている方々へメッセージを送ろう」という企画の趣旨の説明と募集を働きかけた。この企画は、義務ではなく任意での参加という方法をとったが、1年生から6年生の児童に至るまで多数の児童が参加した。メッセージ回収後、委員会の児童が台紙に一つ一つ貼り、完成させた。それを上記の2つの病院に届け、最前線で力を尽くされている方々に読んでもらうようにした。

このメッセージは歓迎され、成田赤十字病院からは、メッセージへの返事が職員から寄せられ、子どもたちをことのほか喜ばせた。一方、国際医療福祉大学成田病院へのメッセージ寄贈は新聞に大きく取り上げられ、子どもたちの達成感を高める結果となった。「自分たちにもできることがあった」、「自分たちの取り組みをきちんと受けとめてくれた」、「自分たちの取り組みが認められた」と、児童全体としての自己有用感を高める結果となった。

既存行事の改革 ～運動会改革～

運動会改革の具体

すべての教育活動が、これまで通りにはいかない。特に学校行事は、中止・縮小をせざるを得ない。しかし、今年だからこそできる新たな挑戦を試みるには絶好の機会だと考えた。新たな挑戦を通して、当たり前だと思い込んできた既成概念を打ち破るよいチャンスだと考えた。

そこで、この春から延期をしていた運動会の開催方法の大きな改革を行った。運動会と呼ばずに、「モリンピック」と称して開催した。今年だけの方法の実施

を通して、これからの方法の可能性を確かめた。具体的には次のような改革を行った。

ア 紅白対抗の運動会から多色対抗の運動会へ

イ 学年の全児童が学年種目すべてに参加する方法から、エントリー制にして希望する種目に参加する運動会へ

ウ ダンス等、表現種目の中止

エ 保護者非公開

以上4つの改革を行い、今年度以降も継続する価値があるかどうかを検証した。

ただし、ウとエについては、今年度限りの改革というよりも対応であるので、検証からは外していくことにする。検証の方法は、教職員のアンケートと高学年（6年）児童のキャリアパスポート（モリンピックがんばりカード）への記載内容である。もちろん、ア、イともコロナ禍で開催する際の配慮も込められている。アは、いつもより応援席の密を、イは、入退場時の際の密を避ける目的を持つ改革である。また、特にイは、特別支援学級在籍児童が、楽しく運動会に参加できることもねらった試みである。

この開催方法のイメージを、まず校長から体育主任に伝えた。その後、体育主任が具体的な方針・方向性を示した。それをもとにして実施方法や準備等の詳細な計画を作成し職員会議で諮り実施にこぎ着けた。

運動会＝「モリンピック」の実現

職員会議提案の後、体育部の教員が中心となり、今年ならではの種目の考案に知恵を絞った。しかも、練習に割り当てられた時間は、熱中症予防を考え、各学年とも4時間とした。各学年主任との調整、学年間の調整、特別支援学級への配慮等、前例がない状況の中、数々の戸惑い、葛藤、議論を経て、極めて巧みなプログラム構成を編み出した。以下に本年度実現させた「モリンピック」の実際を記す。

《令和2年度 モリンピック》

- 0 保護者をはじめ、外部者には非公開として実施する
- 1 縦割り学級4色対抗の競技方法とする
- 2 各学年とも徒競走とアイディア走、そして2種類の団体種目を用意する
- 3 児童は、徒競走かアイディア走にエントリーして参加する
- 4 児童は、団体種目2種目のうちのどちらかにエントリーして参加する
- 5 団体種目2種目のうち1種目は2学年（低中高学年ごと）の合同種目とし、もう1種目は1～3年、4～6年の3学年の合同種目とする
- 6 全校共通種目（靴飛ばし）を設け、低中高学年ごとに競技する

検証～運動会改革～

児童も教職員も、全校児童が集合した状態を感じる最初の機会となった。特に1年生の子どもたちの驚きは大きかったようだ。当日、全く新しい試みだったに

もかかわらず、高学年児童が、正に主体的に係活動に励み、予想を遙かに超えて円滑な運営ができた。前項で示した団体種目の方法は、練習の効率化と異学年交流の絶好のチャンスとなった。

気になるのは、児童と教職員の今回の方法に対する評価である。

まず、児童の評価はどのようなものだっただろうか。6年生を対象を絞って、キャリアパスポートの「昨年度までの運動会と比べてどうでしたか」という設問に対して記された児童のコメントの精査をしてみた。精査の視点とその結果を表5に示す。

《精査の視点》

- ・肯定的なコメント数とその内容
- ・否定的なコメント数とその内容

コメントの精査（分類）にあたっては、一文で表現されたものでも、その中に複数のエピソードが含まれていれば、別々に分類した。（例：家族に見てもらいたかったけれど、今までと違う楽しさがあった → 否定的コメント1（家族に見てもらいたかった）肯定的コメント1（今までと違う楽しさがあった））

【表5 児童のモリンピック評価（6学年児童120名対象）】

総数	精査の視点ごとのコメント数	視点につながるコメントの例
肯定的 コメント 126	多色対抗に関するコメント数 28	・赤白よりも4色の方が楽しかった ・4クラス対抗だったのでクラスの中で絆が深まってよかったです ・4色の方が楽しくて盛り上がったから赤白よりモリンピックの方が思い出に残りました
	エントリー制に関するコメント数 10	・自分の出たい種目に出られるエントリー制がよかった ・自分の競技が選ばたので楽しかったです
否定的 コメント 72	多色対抗に関するコメント数 1	・昨年までの方が楽しかった
	エントリー制に関するコメント数 1（再掲）	・昨年までの方が楽しかった（再掲）

一方、教職員の評価も、好意的な評価を下した。多色対抗については、継続的な実現がその年度の児童数にもよるという理解があるので、コメントの数は少なかった。一方、参加種目のエントリー制については、ほぼ100%の教職員が肯定的なコメントを記した。

参加種目のエントリー制については、これまでの運動会に関わる教職員の認識にない発想であり、実施した結果、成功した実感を持てたためか、来年度以降も継続してほしいという声が多く上がった。来年度につながる価値ある改革となっ

たことが検証された。また、多色対抗という方法も児童に受け入れられたとともに、こうした競技方法が支持されたことが確かめられた。

なお、児童の否定的なコメントが多かったのは次のようなものだ。

- ・半日で終わらず一日行事で弁当にしてほしい・・・コメント数17
- ・種目が少ない・・・コメント数15
- ・家族に見てほしかった・・・コメント数5

運動会という行事は、保護者に見せる・見てもらい子どもの成長を確かめてもらう場でもある。この意味を完全に切り捨てるべきではないと考えた。そこで、保護者非公開としながらも、モリニックの様子を動画で撮影したものをネット上で限定公開の方法で視聴できるようにしたことも加えて述べておきたい。

課題～運動会改革～

自分の発案で試みた改革だった。熱中症の心配もあった。そのため、可能な限り校庭で練習の様子を見守り、支援や万一の際に準備した。その過程で見えてきた課題もあった。

練習風景を見る限り、種目そのものの練習よりも入場と退場の練習に費やしている時間が長いということだ。入場はさることながら、特に個人種目の退場など整然とする必要はない。むしろ逆に熱中症の危険と密状態の危険を高めてしまう。考え方の柔軟さが求められる。「整然とした秩序」に傾倒する傾向が浮き彫りになった。

教職員の研修の持ち方と不登校児童への対応

教職員の校内研修について

コロナ禍の状況において、参観者を集めての校内授業研修は不適切だと考えた。小学校では教科を一つに絞って全教員で、研修を進めていくことが多い。指導案の作成と検討に比較的膨大な時間をとる。

たとえ1年間でも、こうした方法とは異なる取り組み方ができないかと考えた。学校としての研究教科は、国語としてすでに進んでいたため、研究教科は変えずに、任意の方法で研修に臨むことを目指した。そこで考えたのが、「ゼミ方式で・授業構想を議論する」、「見せたい授業を自分で告知・授業後にレフレクシオンシートを授業者に送付」という方法だ。

まず校長が、校内の国語研究部に属する教員に呼びかけて動き出した。この動きが、他の教員を巻き込むまでには至らなかった。一方で、指導案の下原稿をもとにしたときよりも、授業（単元）構想の段階での議論の方が活発化しやすいことを感じた。

この経験を生かし、来年度は、構想の段階での議論を行い、その後の指導案については自らの責任において作成し、他者にさしだし評価を受けていくという方法を提案していきたい。働き方改革と自分で授業を創る力の向上という二つの価

値があると考える。

不登校傾向の児童への対応

コロナ禍において最も進化を遂げたのが「オンライン〇〇」だろう。オンラインで学びの保障を図っていくことが急務となっている。この動きの中で、私にとって最も切実で可能性を試したかったことが、「不登校傾向児童と教室がオンラインでつながり、不登校状態であっても学校との絆を感じさせる」ということだ。

6学年の不登校傾向にある児童を対象に、この方法を試みた。保護者と本人の了解をとって、教室の授業にオンラインで参加するわけである。当初は、様々な要因でスムーズにできなかったが、現在は、不登校傾向の児童が画面上でグループでの話し合いに参加したり、学級の友達と同じようにリコーダーの練習を行ったりする場面が増えてきた。

よい傾向だとは思いますが、「学校に行かなくても大丈夫なんだ」という気持ちにさせてしまうことに危険を感じる。ともに学ぶ楽しい雰囲気を感じさせることと、「いつ教室に復帰しても大丈夫なんだな」という気持ちにさせていくことが肝要であることを忘れてはならないと考えている。

(3) ここまでの取り組みを振り返って

毎年、私は6年生の児童全員と15分程度の時間で面接を行っている。そのときに、必ず「学校生活が楽しいか」という質問と、その理由を尋ねることにしている。今年も7月からスタートし、現在50名ほどの子どもにインタビューした。今のところほとんどの児童が「楽しい」と回答してくれる。理由の中には「不自由なことがあるけれど、その分特別なことができることがある」と回答する児童も複数いる。こうした子どもたちの声を耳にすると、これまでの取り組みが報われる思いだ。

コロナ禍の状況が劇的によくなる気配はない。子どもたちと教職員とともに、特別な時代の創造的な取り組みの発想を促し、議論し、挑戦していくようにしたい。

4 これからのこと・・・

STEP 2における学校生活様式

STEP 1 クリアの公表後、直ちに教務主任を中心とした教務部が動いた。STEP 2における行動様式の全校共通理解をしなければいけないからだ。どんな規制緩和をしていくか、5月に作成したものに改訂を加えた。その後、学年主任に諮り、教職員に周知した。同時に学校だよりを通じて、保護者にも知らせていった。

右が改訂したガイドラインの一部である。この他、英語・体育・家庭科・理科・給食・清掃・帰りの会・下校・特別教室の使用等について、活動や使用方法のガイドラインの改訂版を作成し教職員の共有化を図った。

現在このガイドラインに従って教育活動を展開しているところである。

しかし大切なのは、児童にわかりやすく届けていくことである。そして、児童が切実なこととしてこの先もこの状況を意識して行動していくことが大切だと考えた。

そこで、以下の手立てをとることにした。

ア STEP 2の行動様式をイラストで示したチラシを配付し、啓発をする

イ STEP 3になったらできるようにしてほしいことを児童自身が教職員に伝えていく機会をつくり、児童が願いを実現のために行動できるようにする

上記のために、教務部が児童向けのチラシを作成した（片面のみ抜粋）。そして、上記イを反映させたのが、太枠で囲んだ部分である。ここに書かれたことをどう扱っていくか。これについても児童会が動き出そうとしている。

<共通認識>

- ①命になるようなことは避ける。
- ②半留用具等の使用に関して、毎回消毒する必要はないが、子どもたちがしっかりと手洗いうことで対応。
- ③必ず手を洗う時間（登校後・給食前・清掃後・外から帰った後）、その他、共用器具を使った後など、適宜声かけをする。
- ④マスクの着用は必ず行うが、外での活動については、熱中症等の懸念もあることから、その場の判断での最善策をとる。
- ⑤休み時間等、子どもたちの遊び方について、教師側から禁止事項は定めないが、感染対策のことを考えて、少し遊び方を工夫するなど、子どもたちから自主的に考えられるようになると望ましい。また、休み時間に限らず、どんな場面においても、なぜこのような対応を取っているかを、子どもたちが納得し、さらには自発的に考え行動ができるように、教師側が働きかける。
- ⑥その他判断に迷ったときは、とりあえずストップ（リスクの少ない方向への対応）する。その際、管理職の判断を仰いだり、職員で協議したりする。

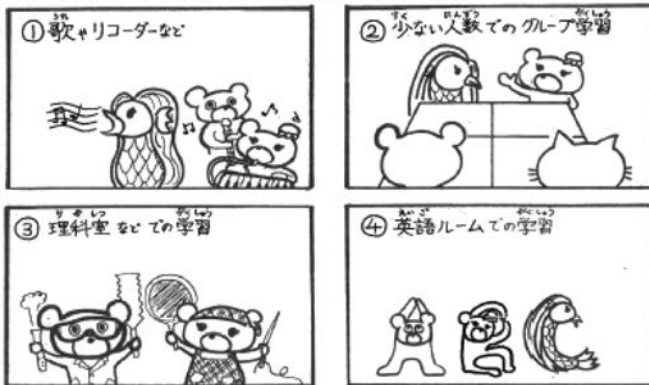
◇以下活動ごとのガイドラインです。

教科等	行えること	行えないこと
登校時刻	<ul style="list-style-type: none"> ・分散登校を行う。 高学年→7：30～7：40 低学年→7：40～7：50 中学年→7：50～8：00 ※兄弟姉妹と一緒に登校する場合は、どちらかの時間帯に併せる。 <u>※部活動が始まった場合（5年の陸学館行以降）、朝の朝会の際に限らず時間差を全校で行う。</u> 	
登校した後の児童の動き	<ul style="list-style-type: none"> ・登校前での健康チェックから、登校中での一斉健康チェックに変更する。 	<ul style="list-style-type: none"> ただし、これまで通り、校庭での授業は必ず実施し、授業をしていない場合は、学校で授業を行う。
朝の会	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>席の対策をしながら、前に出での朝会等は可能。</u> ・<u>朝の歌は週1回で実施。学年ごとに順番を決めて行う。</u> ・<u>人との距離は確保しながら前向きで歌ってよい。</u> ・<u>朝の歌を歌わない日はスピーチ等を行う。</u> 	
音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・合奏・リコーダー等は可能。マスク着用、紙袋・紙筒を付けて広い場所で行う等、工夫して実施する。 ・ポディーパーカッション ・鑑賞 ・音楽作り ・打楽器による演奏 	

子どもたちが自分たちの要望を声に出し、要望を実現させていくために、子どもたち自身が、次なるアマビエチェックをクリアしていこうとする、こんな姿が実現できないものかと願っている。ポトムアップの形でSTEP 3になったときの行動様式が定まればよい。願わくは、STEP 3になった際のガイドラインが、公津の杜小の教職員と児童会（もしくは全児童）の連名で作成され、それが保護者の手にも渡るようにしていきたい。そうなったとき、児童—学校—保護者が手を携えて「WITHコロナ」を乗り越えていくための準備が備わったと言える状態になるのだろう。

Go To STEP3

みなさんが意識し、支えあった結果、わたしたちはステップ2に上がりました！
ステップ2では、こんなことができるようになります！



おたがいを思いやりつつ、さらに学校生活を豊かにするには

みなさんのアイデアが大切だと考えます。

ステップ3では、どんなことができるようになりたいですか？

わたしのアイデア



今までコロナでいろいろな事ができなくなってしまい、くやしい思いをしてきたことが多くあります。この状況をみんなでのりこえてさらに楽しい学校生活を送りたいです。そのためにも感染対策をていし、ステップ3にけるようにがんばりましょう！

5 おわりに

一つの学校の事例としてここまで書いてきた。この先も不安や心配は尽きることはない。ここまでの感染拡大に子どもの責任は微塵もない。私たち大人は、この状況下での子どもたちの声に、願いに、耳を傾けるべきだと思う。子どもたちは、その願いを大人たちに発信すべきだと思う。それが最後に載せたチラシの太枠だ。自分たちでもこの状況に希望を見いだす力を持っているのだということを感じさせていきたい。希望はいつも与えられるものではなく、時にこうして自分たちで壁をこじ開け、導くことができるものだと思ってほしいと強く願う。学校の中で、児童による市民運動が巻き起こり、大人が真剣に子どもと向き合いながら、協働して学校生活をつくっていくまたとないチャンスかもしれない。

最後に、ここまでの取り組みが実現できている大きな理由は、教頭を中心とする本校教職員の職務へのひたむきな姿勢と、保護者の深い理解だと確信する。厚く感謝していることを記し、稿を閉じたい。